

総合カルチャー誌「スペクテイター」編集長

青野 利光 (42)



「豊かな自然や人とのつながり、日本の地方にはいいものがたくさん残っている」と青野

心地よい生き方見つけて

「豊かな自然や人とのつながり、日本の地方にはいいものがたくさん残っている」と青野

アルバイターたちへメッセージ

ミカンアルバイターの支持を集める年2回発行の総合カルチャー誌「スペクテイター」。産地アルバイトを巡る旅を紹介したユニークな特集や、投げ掛けるメッセージが共感を呼んでいる。編集長の青野利光はアルバイターをどうとらえているか。

「ミカンアルバイターは、のうま味を感じたのは情報生き方を探しているように

技術（IT）関連の起業家らしい。若い人はマネーゲームの味も知らないし、今

自然を好み、シンプルに生

うな「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

た。1970年代にも同じような「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

た。1970年代にも同じような「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

た。1970年代にも同じような「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

た。1970年代にも同じような「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

た。1970年代にも同じような「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

た。1970年代にも同じような「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

た。1970年代にも同じような「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

た。1970年代にも同じような「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

た。1970年代にも同じような「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

た。1970年代にも同じような「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

た。1970年代にも同じような「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

た。1970年代にも同じような「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

番組制作・音楽出版会社社長

藤田 祐司 (47) 滋賀県近江八幡市

ミカンアルバイター事業を支える人たちがいる。番組制作・音楽出版会社社長で、各地の地域おこしにも携わる藤田祐

司は、農協や行政とともに運営を担ってきた一人。若者と農家が織りなすドラマを見つめてきた。



山思う農家の涙原点

「一緒に飲んで遊べ」

きっかけは地元農家との出会いだった。仕事で訪れた八幡浜。真穴で酒席に釣りと歓待を受け、「北針」の物語を後世に伝える映画を作りたいという夢を打ち明けられた。

学生ら多くの若者が途方に暮れていた。「女の子をアルバイターとして呼んでやってほしい。僕が味

たを開ければ『おなが来た』とおっちゃんたちが一番張り切っていた」と笑

た。1970年代にも同じような「自然にかえる」という米国発の動きがあっ

声が聞きたい

Voice

えひめ

「真穴はハートフルな村。若い人たちはぎっしり何かをつかんで帰るだろう」と話す藤田

「い」と思いついた。

最初の2年は大阪限定の求人。学生が多かったが、職も家もない年配の女性やリストラされた男性も面接に来た。「人生に疲れた新地のホステス」がヒョウ柄のミニスカートをはいて真穴を訪れた。

農家からは「一番忙しいときにチャラチャラした連中を連れてきてて村をつぶす気か」と言われたこともあったという。しかし「ふ

2009年2月。元アルバイターが真穴中学校に招かれてコンサートを開き、事業5年目に制作した「オレンジ色のふるさと」を歌って「故郷」への思いを伝えた。後日、地元の主婦から一通の手紙が届いた。

「みんながすごいという夕日を何にも感じずに過ごしてきたが、振り返って見た夕日はやっぱりすごかった。当たり前の日常、日常外から見ると感動的なの中にいると見えな。歌を聴いて、ふんふんを大切に

する気持ちが思い起こされたというのです。うれしかったですね」

理があった。ただ当時の価値観には、学点も多い。金銭的な豊かさより、自然を大切に

して家族や友人とほろりある生活を送ろうとするのは、ごく自然な生き方。近年そんな価値観が再評価されているのは。

「失敗は繰り返されないだろうか。『反文明的な生き方をしよう』というわけではない。資本主義の中で生きていても

経済やお金以外に力点を置き、心地よい空間で幸せに暮らしている人はたくさんいる。

季節アルバイトにはそんな生き方のヒントがあるんじゃないか。彼らはいつか自分の心地よい場所を見つけてと思う。